慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂 (四)
Sub Title	An offering of utaibon to Nishinomaru of Edo castle during the Kyoho era and revision of the verses of noh songs (4)
Author	高橋, 悠介(Takahashi, Yusuke)
Publisher	慶應義塾大学附属研究所斯道文庫
Publication year	2023
Jtitle	斯道文庫論集 (Bulletin of the Shidô Bunko Institute). No.57 (2022.) ,p.297- 362
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00106199-20220000-0297

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂（四）

高橋悠介

一、はじめに

前稿（一）～（三）において、観世文庫に伝わる西丸献上識語を持つ謡本の書誌を示し、これらが主に外組所収曲の謡本である点をふまえ、その前／後に位置する刊本として、元禄三年六月山本長兵衛刊本、及び明和改正謡本との異同などに注意しながら、その本文を検討してきた。[1] また、「家重公御本」と記された謡本が存在する曲目については、西丸献上識語本との関係についても指摘した。

西丸献上識語を有する謡本で、検討し残している曲目に、〔和布刈〕・〔大社〕（以上、紺表紙謡本）・松山鏡・〔砧〕・〔第六天〕・道成寺・〔嵐山〕（以上、石畳艶出模様紺表紙謡本）・〔逆鉾〕・〔巻絹〕・吉野天人・龍虎・〔橋弁慶〕（以上、渋表紙謡本）・〔江乃嶋〕（表紙闕）があり、これらと密接に関わる謡本の曲目に、雷電・谷行（石畳艶出模様紺表紙）がある。このうち、〔和布刈〕〔大社〕は、比較対照すべき謡本との関係で現段階での検討を見送っており、識語が胡粉で消されている道成寺と、西丸ではなく二丸献上識語を持つ〔嵐山〕〔橋弁慶〕も、今は検討から外しておく。なお、前稿（一）で、一番綴謡本「御裳濯川」（4／2／34）として挙げた謡本は、石畳艶出模様紺表紙に貼られた金箔散題簽（江戸後期の後補か）に「御裳濯川」と書かれているも

のの、本文は「第六天」に相当する謡本であった。不適切な形で書名を掲出したことをお詫びして訂正する。[2]

本稿では、石畳艶出模様紺表紙謡本の松山鏡・雷電・〔砧〕の本文から検討し、次に渋表紙謡本の〔巻絹〕・龍虎、及び表紙を闕く〔江乃嶋〕を検討する。続いて、対校本の関係で〔第六天〕・〔逆鉾〕・吉野天人をまとめて扱った上で、最後に、献上識語はないものの享保十四年九月廿六日の観世清親の奥書を持つ、谷行の本文を検討する。龍虎以外の九曲の本文は同筆である。

基本的には、西丸献上識語を持つ謡本の前と後に位置する謡本として、元禄三年六月山本長兵衛刊本と、明和改正謡本とを対校本とする。西丸献上識語を持つ松山鏡の本文については、江戸初期写共紙表紙綴葉装一番綴謡本「松山鏡」（観世文庫3／3／36）の、朱筆による改訂後の本文と近似するため、同本とも対校している。雷電は、明和改正謡本に収められていないため、元禄三年六月山本長兵衛刊本とのみ対校した。龍虎は、元禄三年六月山本長兵衛刊本を補う形で、それと全く重ならない曲目三十番を元禄三年六月の山本長兵衛の刊記を付して出した三十番本に入っており、この三十番本と対校した。この三十番本は実際の刊行年月は享保以降の可能性が高いと推測されている。[3]

また、〔第六天〕・〔逆鉾〕・吉野天人は、番外謡本を別にすれば、元禄三年六月山本長兵衛刊本などの従来の外組本には収められておらず、明和改正謡本が新たに収めた曲目である。明和本を廃止した後も、「天明三年能名寄」（諸流書上。法政大学鴻山文庫五七7）にも観世の所演曲として掲載され、天明四年（一七八四）六月山本長兵衛刊本の天明新十番に収められた。そこで、より遡る時代の対校本として、三百番本・四百番本と通称される番外謡曲集の版本を用い、後の時代の対校本としては、明和改正謡本だけでなく、天明四年（一七八四）六月山本長兵衛刊本も用いることとした。

これら対校に用いた謡本を、次の略号で示す。

［共］江戸初期写共紙表紙綴葉装一番綴謡本「松山鏡」（観世文庫3／3／36）

［三］貞享三年九月林和泉掾刊本（三百番本。版本番外謡曲集）[4]

［四］元禄二年正月林和泉掾刊本（四百番本。版本番外謡曲集）

［元］元禄三年六月山本長兵衛刊本（法政大学鴻山文庫五234）

［元］元禄三年六月山本長兵衛刊記三十番本（法政大学鴻山文

庫五235）＊龍虎のみ本書と対校。
［明］明和二年六月出雲寺和泉掾刊本（観世文庫81／1／1－20及び81／2／1－20。習十番の砧のみ34／1／1）
［天］天明四年六月山本長兵衛刊本（法政大学鴻山文庫五377イ）

西丸献上識語を持つ本は、主に表紙の色・模様から略称を取って［石］［渋］としたが、表紙を闕く〔江乃嶋〕は［西］とした。／で区切って示した数字は、観世文庫での整理番号である。

校異の掲出方法は、前稿に倣っている。当該校異の位置は［元］元禄三年六月山本長兵衛刊本での丁付により示したが、吉野天人では［三］貞享三年九月林和泉掾刊番外謡本、〔第六天〕・〔逆鉾〕では［四］元禄二年正月林和泉掾刊番外謡本での丁付により示した。［　］内に複数の伝本が示されている場合、表記はそれぞれ異なる場合もあるが、最初に挙げた本の本文を掲出している。漢字の宛て方や仮名づかいが異なっていても、謡う際にほぼ同じ音になる詞は、原則的に校異に取らないが、そうした場合でも、意味が大きく変わる用字の場合のみ掲出している。掲出する校異の本文について、役名や地謡は原則的には示していないが、掲出文の途中で役が替わっている時のみ、役名も示している。

二、石畳艶出模様紺表紙・五番綴本の「松山鏡」「雷電」と一番綴本「〔砧〕」

◆松山鏡

松山鏡を収める謡本は石畳艶出模様紺表紙の五番綴本で、「源太夫・橋弁慶・三山・松山鏡・雷電」の五曲を収めるが、このうち「松山鏡」末尾に「享保十四年七月七日　清親／西丸御本へ右之通章并ニ持當リ相納／大久保伊勢守殿迄差上ル也」と朱書、「雷電」の末尾に「享保十五年十一月八日ニ去ル方より申来リ十一日書」と清親の墨書がある。

先述したように、観世文庫の江戸初期写共紙表紙綴葉装一番綴謡本「松山鏡」（3／3／36）に朱で書入れられた改訂本文が、西丸献上識語本の改訂本文に近似している。そこで、この江戸初期写本も合わせて対校結果を示した。ただし、同書には朱・墨・緑等の筆による書入れがかなり多く、それら全てを掲出すると煩雑になるため、西丸献上識語本と元禄三年六月刊本及び明和改正謡本との異同がある箇所に限り、この江戸初期写本の

本文及び改訂書入れを［共］として示すことにする。江戸初期のもとの本文よりも、朱の書入れとの共通性に着目することから、掲出順は［元］［石］［共］［明］とする。［共］の本文には、墨・朱・緑の筆による校合の書入れが同時に加えられていることもあり、正確に示すのが難しいため、主に本文改訂に関わる朱の傍記を中心に示し、朱以外も含めた傍記の状態は、その後の（　）内で説明することにする。

この江戸初期写綴葉装謡本「松山鏡」（3／3／36）[5]の書誌は以下の通り。本文共紙表紙（二六・六×一九・一糎）左上に小さく「松山鏡」と曲名を直書する。その少し下に漢字一字の残画が残るが読みづらい。また、表紙左端の中程に「七冊之内」とあり、表紙上部中央に小さく「外」と墨書されている。内題はない。綴葉装一帖で、周囲を化粧裁ちしていないという特色があり、全十四丁（墨付十四丁）。野上記念法政大学能楽研究所編「観世宗家所蔵文書目録（付解題）」[6]に、

「御家流書体で片面六行書。節付黒雪風。上部や左右に余白を多くとった書入れ用の本らしく、周囲も截断しないままの未装本。朱墨両筆による本文訂正がすこぶる多く、またサシ・クセ以下には墨筆の節付の他に四色に色分けした節付校合がある。その上部に「忠親」（薄紫）、「清親」（淡黄）、「重成」（焦茶）、「重記か」（藍）と色分けした注記があるのは、各色の節付の原本を注したもの。原形は江戸初期の本で、節付校合が元章時代らしい。」

とある通り、代々の観世大夫に関わる諸本を参照し、節付については校合結果を色分けして注記している。本文改訂は、朱と墨によるものが中心だが、一部に緑色の筆による傍記もあり（節付校合に用いた四本のうちのいずれの本文であろう）もあり、これは改訂でなく校合結果の書入れとみられる。朱墨による改訂本文がどの観世大夫の段階のものかという点については、元禄三年六月山本長兵衛刊本の本文との相違点や、清親本を用いた節付注記があることなどから考えると、十四世清親か十五世元章の段階の可能性が高そうである。ただし、元章の関与のもと刊行された明和改正謡本とは一致しないことからすれば、清親段階の本文の可能性は充分にあろう。

以下、元禄三年六月山本長兵衛刊本、江戸初期写共紙表紙綴葉装一番綴謡本、明和改正謡本との校異を示す。

＊［石］石畳艶出模様紺表紙五番綴謡本「源太夫・橋弁慶・三

山・松山鏡・雷電」（75／8）

［共］江戸初期写共紙表紙綴葉装謡本「松山鏡」（3／3／36）

【1オ】

［元石］住居仕もの

［共］住居仕者（スル）（「仕」に「スル」と朱傍記）

［明］住居する者

［元］扨も我

［石明］扨も某

［共］扨も我（某）（「我」に朱の抹消符を付し、朱墨重ね書きで「某」と傍記）

［元］又忘形見に姫を一人持て候か

［石］又其忘れ形見に、姫を一人持て候か

［共］又其忘レ形見に姫を一人持て候か（「其」に朱墨の見消線）

［明］また忘れがたみの女子一人候が

［元石］たいの屋を作り片原に置て候

［共］たひ（い）の屋を作り片原に置（キ）て候（「ひ」の左右に緑・朱・墨で三箇所「い」と傍記、「片原に」に朱墨の見消線、「キ」は緑）

［明］持仏堂のかたはらをしつらひ住せ置て候

［元］今日は彼か母のめい日

［石］又今日はかれか母の名日（「石」は「又」傍記）

［共］又今日は妻にて候者のめいにち（「又」は朱と緑で傍記。「妻にて候者の」に朱墨の見消線を付し、墨で「彼か母の」、朱と緑で「かれか母の」と傍記）

［明］又今日は母の命日

【1ウ】

［元］持仏堂に立出、焼香せはやと存候

［石］持仏堂に立出焼香せはやと思候

［共］持仏堂に立出（越）、焼香せはやと存候（思ひ候）（「出」に抹消符を付し墨で「越」と傍記、その上に「出」と朱で傍記。「存候」に朱の抹消符を付し、右に大きく「思ひ候」と朱傍記、その右に小さく「存候」と朱傍記、左に緑で「おもひ候」と傍記）

［明］持仏堂に参り焼香せはやと思ひ候

［元石共］雲となり雨となる、やうたいの時と、めかたく、花とちり雪ときえ、きむこくのはるゆくゑもなし（ただし［共］は「雨となる」を「雨となり」とする）

［明］（ナシ）

［元石共］月日の道に関守なければ

［明］うつゝなや月日の道に関もなければ

［元石共］母御に離れてことしははや、既三とせの其日なり

［明］母御にはなれまいらせて、今日は三年の其日なり、あら御なつかしや候

［元］あらむさんや候

［石明］荒無慙や

［共］あら無慙や候（「や」の右下に朱で「候」と傍記）

【2オ】

［元］いかに姫有か

［石共］いかに姫か有か（［共］は「いかに姫」に朱墨で「か有か」と傍記し、線で繋ぎ挿入）

［明］如何に姫

［元］父か来りたるに持仏堂の戸を開き候へ

［石明］父か来りたるそ持仏堂を明候へ

［共］△持佛堂の戸（父か来りたるそ△）を明候へ（「父か来りたるそ」を朱傍記で挿入。「の戸」に墨で抹消符）

［元石］何とやらん

［共］何哉覧（本行ではなく傍記の一部）

［明］何やらん

［元］物を立かくすやうに見えて候

［石］物をたち隠す様に候、いかに姫（「いかに姫」傍記）

［共］物をたち隠す様に候、いかに姫（全て傍記の一部。「物をたち隠す」までは朱墨重ね書きで、そこから「けしきのみ見て候はいかに」と続く墨書と、「様に候、いかに姫〇」と続く朱書に分かれる。）

[明] 様なるはいかに

＊[元] 2オ4行目「扨も汝か母にをくれし時」以下、2ウ6行目「ものをたちかくすけしきの見えて候」まで、[明] ナシ。この部分、[元] [石] [共] のみ対校する。

[元] 諌によつて

[石] 諌により

[共] 申(イサメ)に~~よつて~~(より)(「申」に「イサメ」と朱傍記。「よつて」に朱の見消線を付し「より」と傍記)

【2ウ】

[元] 父か来りて姫はととは、

[石] 適父か来りて姫よと呼は

[共] 適父か来り(て)姫かと(よと呼は)言葉をかけは(よとよは、)(「来り」の下の左右に朱と緑で「て」と挿入。「言葉をかえは」に朱の見消線を付し、右に「よと呼は」と朱傍記、左に「よとよは、」と緑で傍記)

[元] さはなくして、何とやらむ

[石共] さはなくして、何やらん([石] は「し」傍記)

[元] 扨は人の申事も誠にて有けるそや

[石] 扨は人の申も誠にて有(候ひ)けるそや

[共] さては人の申も誠にて候(候ひける)そや(「候」に朱の抹消符、「候ひける」と朱傍記)

[明] さては人の申も誠にて候ひけるぞや

[元] 誠やらん

[石] けに汝は

[共] 実~~おこと~~(汝)は(「おこと」に朱の見消線を付し、「汝」と朱傍記)

[明] 汝は

【3オ】

[元] 浅間敷心を持てあるそ、母を恋しく

[石] 浅増(おそろ)き心を持て有そ、母を恋しく

[共] 浅間敷事(おそろしきこころ)をは~~たくみけるそ、いかにも~~(持て有そ)母を悲(恋)しく(「浅間敷事」「たくみけるそ、いかにも」「悲」に朱の見消線を付し、「おそろしきこゝろ」「持て有そ」「恋」と朱傍記)

[明] あさましき心をばもちて有ぞ、実の母をこひしく

［元共］正敷
［石］正しく（う）
［明］まさしく

【3ウ】
［元］同じ業に
［石明］同し罪に
［共］同し業（罪）に（「業」に朱の抹消符を付し「罪」と朱傍記）

［元］何とて物をはいはぬそ
［石］此事偽り、父か前にてつゝ、ます申候へ、何とて物をは申さぬそ
［共］此事偽り父か前にて裏すくに申候へ、兎に角、何何とて物をは申さぬそ（「兎に角、何」までは朱の見消線、「兎に角、何」以下に墨の見消線も引かれているが、「とて」の上に朱で「何」と記す）
［明］何とて物をば申さぬぞ

［元明］申候へし
［石］申候へし、まゝ母こを木さうにうつし、しゆそし申と仰らるゝ、
［共］申候へし、まゝ母御を木像にうつし、呪詛し申とは（仰候は）（「は」に朱の抹消符、「仰候は」と墨で傍記）

【4オ】
［元石共］母のおもたてうつりしより、猶若やきて見え給へは
［明］母御の御顔あり〳〵と、有しより猶わかやぎて、みえさせ給へばうれしくて

【4ウ】
［元］母の何しに鏡に影のうつりて見え候へき
［石］母の何しに、鏡に移りて見え候へき
［共］何とてはゝか影の鏡にうつり候へき（行間の挿入文の一部）
［明］母の何とて鏡にうつるべき

［元石共］但きつと
［明］但

［元］漢の武帝の后李夫人なくならせ給ひて後

［石］かの漢の武帝の后、李夫人なくならせ給て後（「かの」傍記）

［共］彼漢の武帝の后、李夫人むなしく成給ひて後（「むなしく」に朱の見消線を付し「なくならせ」と朱傍記。なお「李夫人」の後に「崩御の後」と墨で追記し、この記事に続く「御門后の」に線でつなぐ記事もある）

［明］漢の武帝李夫人にわかれさせ給ひ

＊［元］4ウ5行目「御門后の御別れを悲しみ給ひ」以下、5ウ7行目「二度姿婆に送り給ひしためしもあり」までの長い記事の部分、［明］は代わりに「御歎の餘に方士に仰て、反魂香をたかしめられ、二度李夫人の姿をみそなはしけるとかや」とするのみ。この部分、［元］［石］を対校し、異同箇所の［共］も本文もあわせて示す。

［元］御姿を甘泉殿の

［石共］御姿を甘泉殿の（両本とも「御姿を」傍記挿入。［共］は朱傍記）

［元］本よりも

［石］本来（「ヨリモ」左傍記）

［共］本より

【5オ】

［元］仙人つけて

［石］仙人の告て

［共］仙人のつけて（「仙人」の右下に「の」朱墨で傍記）

［元］月の夜の隈なきに

［石共］月の夜の隈なかりんに（両本とも「からん」を見消にして「き」と傍記）

【5ウ】

［元］后の御姿ま見え給ひし

［石］后の御姿、十度ま見え給ひし

［共］后の御姿帝にま見え給ひし（「帝に」に朱墨の見消線、「ひ」は朱墨で傍記）

［元］娑婆に
［石］娑婆へ
［共］娑婆に（「に」に墨の見消線を付し「へ」と墨で傍記）

【6オ】
［元石共］上代の事、是は末世の今の世に
［明］仙家の法術、是はなべての薬だになき所なれば

［元］存候へ共
［石明］存候はね共
［共］存候へとも（朱墨の見消線を付し、朱墨で「はね共」と重ね書き）

［元］左様の事も候らん
［石明共］左様の事もや候覧

［元石共］や、されは社筋なき事を申候
［明］（ナシ）

［元］惣して此鏡に母か影のうつる事はなきそとよ
［石］此鏡に母の影の移る事はなきそとよ
［共］此鏡に母か影のうつる事はなきことにてあるそとよ（「ことにて」に朱の見消線を付し「そとよ」と朱傍記）
［明］かゞみにむかひよく見れども母の影は見えず

【6ウ】
［元明］筋なき事をは申そ
［石］か様に筋なき事を申そ
［共］いやまさしく御人候物を　いひや思ひもよらぬ事（本行に朱の見消線、「か様に筋なき事を申そ」と朱傍記）

［元石共］其うらみにや恋衣のみえし
［明］御うらみにて父うへにはみえじ

［元］おほし召るらめ
［石］思しめさるらめ（「らん」左傍記）
［共明］おほし召るらん

【7オ】

［元石共］親のかうこのまゆすみの（［石］は「う」に墨で「ふ」と傍記）

［明］母のかふこの黛の

［元石共］いとほそし誰をかも恋やせ貝そ見てもなく、涙かすみの悲しやな、そこより曇ります鏡

［明］いとほそやかにうつくしく、若やぎませるおも影を、我父うへの見給はゞ、さすが戀しくおぼさんと思へばいとゞなつかしく涙にくもる此かゞみ

【7ウ】

［元］母か影にて有よし申候はいかに

［石明共］母か影にて有由を申候はいかに（［共］は朱の傍記の一部）

［元石］女なれ共はこねをつけす色をかさる事もなけれは、

［共］女なれ~~はとも~~（とも）はこねをつけ（す）、色をかさる事も~~なく~~（なけれは）（「はとて」に墨の見消線を付し「とも」と墨で傍記。「す」朱墨で傍記挿入。「なく」に朱墨の見消線を付し「なけれは」と朱墨で傍記）

［明］女といへどもよそほふことなし、されば

［元］ましてかゝみなとゝ申物をもしらす候、我一年都へ

［石］増て鏡なとゝ申物も知す候ひしを、某一年都に

［共］~~あまねく~~（まして）鏡なとゝ申物~~を~~もしらす候（ひしを某）、~~我~~（をそれかし）一年都~~へ~~（に）（「あまねく」に朱墨の見消線を付し「まして」と朱傍記。「を」に朱の抹消符。「我」に朱の抹消符を付し「ひしを某」と右に朱傍記、左に「をそれかし」と墨書。「へ」に朱の抹消符、「に」と傍記）

［明］されば鏡など、申ものをもしらず候ひしを、某一年都へ

［元石共］鏡を一面

［明］此鏡を

【8オ】

［元］母にとらせ

［石明共］母にとらせて（共は「尋ね彼者の母に」とある本行に朱の見消線を付し「買取てかれか母に」と朱傍記。「とらせて」

は本行の記事）

［元石］世になき事に悦ひ給ひしか

［共］世になき様に斜ならす　悦ひ人にも見せす隠しをき候ひしか（朱墨で見消線を付し、右に「事に悦ひしか△」と朱傍記、左に「事と悦ひ候ひしか○」）

［明］世になき物のごとく尊み、常にふかく納置候ひしが

［元石］姫を近付、我を恋しく思はん時は、此鏡を見よと申しほとに（ただし［石］、「我」に見消線を付し「母」と傍記）

［共］姫を近付、此鏡をわこせにとらするそ、母を恋しく思はん時は、此鏡を見て心を慰め候へと申置候ひしを（「そ」には墨の見消線を引き「也」と墨書し、「此鏡をわこせにとらするそ」全体に朱の見消線を引く。「候ひしを」を黒線で見消にし、「しを」と追記した後、「見て心を慰め候へと申置候ひしを」に朱の見消線、「見よと申し程に」と朱傍記）

［明］かれにあたへていひけるぞや、をさなき心にはむかふものゝうつる物といふ事はしらず

［元］母そとおもひ

［石明］母と思ひ

［共］母と思ひ（墨の見消線を付し「の影のうつると申」と墨で傍記）

［元明］鏡の謂を語つて

［石］鏡の謂を申て（「申て」に見消線、「語て聞せ候へは」と傍記。）

［共］鏡の謂を申て（朱見消線を引き、「語て」と朱傍記）

【8ウ】

［元］何にても

［石明］何にてもあれ

［共］何にても（この前後も含め朱で見消線。「も」の右下に「あれ」と墨書。）

［元石共］こゝをもつておもひしれ

［明］其儘うつる物ぞかし

［元石共］今こそかくともみよし野の

［明］さてはうつしてみよしの、

【9オ】

［元石共］歟冬（ワキ）の　陰（姫）をあやまつ

［明］ことはりを（ワキ）　しらで（姫）

＊［元］9オ5行目「子は親に似るなる物と思はれて」以下、11オ7行目「是や賢女の名をみかくか、みなるへし」まで、［明］は「今までは我影ぞとは」以下の全く異なる詞章。この部分、［元］［石］を対校し、［共］の相当箇所も示す（以下、二箇所の異同のみ）。

【11オ】

［元］壁天の

［石共］碧天を

［元］か、みなるへし

［石共］鏡なるらん

【11ウ】

［元石共］倶生神いそき

［明］くしやうじんはやく

［元］熱鉄のしも

［石明］熱鉄の棰（［明］「熱鉄のしもと」）

［共］熱鉄のしもつ

［元石共］からは娑婆にやとまるらん、たまは冥途に脱の衣の（［石］は「脱」を「もぬけ」と仮名表記）

［明］ときにあいせし此鏡の、今は冥途の煙にいろかえ

【12オ】

［元石共］かうへにきよくさ

［明］かうべに寶冠

［元石共］菩薩の、座像

［明］菩薩の、尊ざう

［元石共］きかす見もせぬ

［明］き、も見もせぬ

［元石共］すはや地獄にかへるそとて、大地をかつはと、踏ならし、大地をかつはとふみ、破つて、奈落の底にそ入にける

［明］あら貴とや有難やと、鬼神に横道ならくの底に、今はかへるとよば、りすて、、そのま、見えずぞ、なりにける

明和改正謡本の独自性が強いのは勿論だが、一方で西丸献上識語本と明和本に共通する本文（西丸献上識語本の改訂本文を含む）が元禄三年六月刊本と異なる例も、複数確認できる。1オ「扨も某」「又今日は」、1ウ「焼香せはやと思候」「荒無慙や」、2オ「父か来りたるそ～」、2ウ「人の申も誠にて候らひけるそや」、3ウ「同し罪に」「物をは申さぬそ」、6オ「存候はね共」「左様の事もや」、7ウ「影にて有由を」、8オ「母にとらせて」「母と思ひ」、8ウ「何にてもあれ」、11ウ「熱鉄の槌」などがそうした例である。また、7ウの［石］「増て鏡なと、申物も知す候ひしを、某一年都に」などは、［石］が［元］と［明］の中間的な本文を持つ例と言える。

また、江戸初期写綴葉装謡本「松山鏡」（3／3／36）の朱による改訂後の本文が、［石］の改訂後の本文に近似していることも指摘できる。3ウ「ま、母こを木さうにうつし、しゆそし申と仰らる、」などは、［元］［明］にない本文で、［石］と江戸初期写綴葉装謡本の朱による改訂後の本文が一致する例である。江戸初期写本に四本の節付等の校合結果を書入れている中では、清親本が最も新しいものであり、朱による改訂後の本文も、元章による明和改正謡本が成立する前の、清親本の本文を伝える可能性が高いのではないだろうか。西丸献上識語を有する本に関連する書入れのある謡本として、注意しておきたい。

◆雷電

先述の通り、石畳艶出模様紺表紙の五番綴謡本の中、「雷電」の末尾に「享保十五年十一月八日ニ去ル方より申来リ十一日書」と清親の墨書がある。この「去ル方」が誰なのかは不明だが、西丸献上を明記する「松山鏡」と共に綴じられていることからしても、江戸幕府関係者の可能性があると考えられる。あるいは嵐山の場合のように、西丸でなく二丸の田安宗武（小次郎様）周辺かもしれないが、「松山鏡」と同じ一冊の中に収められていることから、続いて扱う。雷電は、明和改正謡本には収録さ

れておらず、元禄三年六月刊本との異同のみ掲出する。

＊［石］石畳艶出模様紺表紙五番綴謡本「源太夫・橋弁慶・三山・松山鏡・雷電」（75／8）

【1オ】

［元］今日満参にて候程に

［石］今日満参にて候程に（「程に」左傍記）

【1ウ】

［元］川浪よする汀

［石］漣よする汀

【2オ】

［元］望を

［石］望み~~ヨ~~を（行末に「ヲ」と追記、それを見消して「を」と傍記）

［元］中門の戸ひら

［石］中門の扉（「扉」の左に「トホソ」と傍記）

【2ウ】

［元］比しも今は明やすき

［石］比しも今は明~~らけき~~ヤスキ（「らけき」に「ヤスキ」と傍記）

【3オ】

［元］世に嬉しけに

［石］よに嬉しけにそ

【3ウ】

［元］是を思はめや

［石］是を思はんや

［元］扨其身は

［石］御身は（「は」傍記）

［元］弔ひて候

［石］弔申て候

［元］御弔悉くありかたふ候
［石］御弔ひ悉とゝきて候有難う候（「て候」に抹消符）

［元］師弟の役
［石］師弟の約

【4オ】
［元］真実のこゝろさし
［石］真實心指

［元］菅丞公
［石］菅相公

【5オ】
［元］梵天帝尺の御憐み
［石］梵天帝釋の憐み

［元］なる雷となり
［石］鳴雷となりて（「て」に抹消符）

【5ウ】
［元］かまへて御参候な
［石］構ひて御参候な

［元］かまへて参り給なよ
［石］構ひて参り給ふなよ

【7オ】
［元］されはこそ何程の事の
［石］されはとて何程の事の

【7ウ】
［元］内恩外忠の生未練なり
［石］内恩外忠の威儀未練なり

【8ウ】
［元］なしつほ梅壷、昼の間よるのおとゝ
［石］梨壷梅壷、昼の間夜の御殿

【9オ】

［元］追懸〳〵互のいきほひ

［石］追懸〳〵互に勢ひ（「に」に「の」と傍記）

元禄三年六月刊本との異同はそう多くなく、献上識語本の本文が傍記や見消符による改訂により元禄三年六月刊本と同文になる例もみえる。雷電の場合、享保段階での大きな改訂は確認できない。

◆砧

〔砧〕は石畳艶出模様紺表紙の一番綴本で、西丸献上識語の他には、末尾に朱陰方印「眞觀」が捺されている点が注意される。見返しなどに考証の書入れがあり、一二三函の石畳艶出模様紺表紙謡本群に書入れられている考証の主な筆跡と同筆である。本文の上部余白に記された万葉仮名を用いた注記などからみても、観世元章手沢本であった可能性が高い。

＊［石］石畳艶出模様紺表紙謡本「〔砧〕」（75／54）識語「十二月十一日西丸へ上ル」

【1オ】

［元］在京仕候

［石明］在京仕て候

［元石］在京と存候へ共

［明］在京と存候ひしが

［元石］三とせに成候

［明］三とせに成て候

【1ウ】

［元石］おことを下し候へし

［明］おこと蘆屋の里へ立越

［元石］此程の旅の衣の日も添て、〳〵、いく夕暮の宿ならん夢も数そふかり枕

［明］青繁木の、山﨑過てはる〳〵と、〳〵、立旅衣日もそふ

や夜をもかさぬるかり枕

【2オ】

［元］いかに誰か御入候、都より夕霧か参りたると御申候へ

［石］いかに誰か御入候、都より夕霧か参りたる由御申候へ（「いかに」の前に補入記号の○を付して「急候程に、蘆やの里に着て候、やかてあんないを申そふつるにて候」と墨で傍記）

［明］是ははやあしやの里に着て候、やがて案内を申さうずるにて候

【2ウ】

［元明］なとや音信なかりける

［石］などや音信なかりけるぞ

［元石］御みやつかひ

［明］御みやづかへ

［元石］都にこそは候ひしか

［明］都にこそは候ひつれ

［元石］思ひやれ実は都の

［明］思ひやれさぞな都の

［元石］枯々の契りも絶はてぬ

［明］かれ〳〵に、契りや絶ぬべき

【3ウ】

［元石］うきはそのまゝさめもせて（「さめ」相当部分、［石］は本行「夢」に見消線を付し「覚」と傍記）

［明］などうき事の覚もせで

［元石］むかしはかはり跡もなし

［明］昔にかへるよしもなし

［元石］何哉覧あなたに

［明］あなたに

【4オ】

［元石］あれは何にて候そ
［明］あれは何の音にて候そ

［元石］あれは里人の碪うつ音にて候
［明］あれこそ里人の碪うつ音にて候へ

［元石］蘇武といひし者
［明］蘇武と云し人

［元石］胡国とやらんに捨をかれしに
［明］胡国とやらむにとらはれしに

［元石］妻や子の
［明］妻や子

【4ウ】
［元石］志のすゑ通りけるか、萬里の外成蘇武か旅寝に
［明］其心ざしや通けん、蘇武が在し万里の外まで

［元石］わらはも思ひや慰むと
［明］わらはも思ひはおとるまじ

［元石］心をなくさまはや
［明］心を慰めばや

［元石］いや碪なむとは賤しき者のわさ
［明］いや碪うつは賤の女のわざ

［元明］去なから御心慰めむため
［石］去なから御心慰めの為

【5オ】
［元］なれてふすねの床の上
［石］馴てふすゐの床の上
［明］月漏閨の床の上

［元石］ゆふ霧たちより主従ともに
［明］夕霧たちよりもろ共に

［元］衣に落て松の声、ころもにおちて松のこゑ

［石］衣に落る松の聲、衣に落て松の聲（欄外に朱で「かへし／落る」と記し、朱線で見消した上で、「衣に落る松の聲／正しくは落てトうたふ次第モ落てトうたふ」と記す）

［明］衣に落る松の聲、〳〵

【5ウ】

［元石］たかよと月は、よもとはし

［明］いづこも月は隔めや

［元明］木末はいつれ一葉ちる

［石］葉末はいづれ一葉ちる（「葉」に朱で見消線、「木」と朱傍記）

【6ウ】

［元石］今の礒の声そへて

［明］今の礒に声添て

［元］衣はたちもかへなむ

［石］衣は裁もかへなん（「裁」に墨で「タテ」と傍記）

［明］衣は裁もかへじを

【7オ】

［元石］水かけくさ

［明］水ぐま草

【8オ】

［元］みやこより人のまひりて候、殿は此年の暮

［石明］都より人の参りて候が、此年の暮

【8ウ】

［元石］引わかれにしつま琴の

［明］ひきわかれにし其まゝにて

【9オ】

［元］ひやうはい花の光りをならへ

［石明］ひやうばい花の光りをならへては

【9ウ】

［元石］我は邪淫の業ふかき

［明］我はうらみの罪深き

［元石］報の罪の

［明］報のゆゑに

【10ウ】

［元石］ふた世と契りてもなを、末の松山千代迄と、かけし頼みは

［明］二世と契りつゝ、末の松山いく千代と、たのめし事は

［元石］かゝる人のこゝろか

［明］かゝる人のこゝろや

［元］おふそとり

［石］おほをそ鳥（「ふ」朱線見消、「ほ」と朱傍記）

［明］おほをそ鳥

【11オ】

［元石］鳥獣も心ありや

［石］鳥獣も心有ルや（「有」の下に「ル」と朱記）

［明］鳥獣も心あるや

［元］蘇武か旅雁に

［石明］蘇武は旅雁に

［元石］契りの深き志し、浅からさりし故そかし

［明］故郷をしとふ其こゝろ、あさからざりし故ぞとよ

【11ウ】

［元明］幽霊正に成仏

［石］幽霊正に成仏の

全体的には明和改正謡本の独自性が強く、西丸献上識語本と明和本が一致するのは、1オ「在京仕て候」、8オ「参りて候が、此年の暮」、9オ「ならへては」、11オ「心有ルや」「蘇武は」などに限定され、西丸献上識語本と明和本の関連は見出し難い。

ただし、2オに掲出した夕霧の着台詞において、西丸猷上識語本に補入された台詞と、明和本が近似しているのは注意される。違いは、西丸猷上識語本が「急候程に」とするのを、明和本が「是ははや」とする点のみである。「急候程に」などの「いそ」を含む詞章を削除するのは明和本の顕著な特色で、十代将軍徳川家治の正室五十宮倫子の名前を憚ってのこととされている（『翁草』）。五十宮倫子は宝暦四年（一七五四）に家治と結婚し（縁組は前年）、家治が将軍となるのが宝暦十年（一七六〇）のことである。将軍御台所になる以前の改変とは考えにくく、少なくとも宝暦四年以降の改変と考えられる。五十宮に関わる改変を除いて、着台詞が一致している点は注意しておきたい。

三、渋表紙謡本「〔巻絹〕」「龍虎」、及び「〔江乃嶋〕」

続いて、渋表紙を持つ一番綴謡本「〔巻絹〕」「龍虎」と、表紙を闕いた「〔江乃嶋〕」について、順に検討する。元禄三年六月山本長兵衛刊本及び、明和改正謡本と対校する。

◆巻絹

［渋］渋表紙一番綴謡本「〔巻絹〕」（80／15）識語「十二月五日西丸江上ル」

【1オ】

［元］是は

［渋明］抑是は

［元］御熊野に納め申せとの宣旨を蒙り巻絹をあつめ申候

［渋］三熊野に納め申せとの宣旨に任せ、國々より巻絹を集め候

［明］三熊野に納申せとの宣旨に任、此程熊野へ立越、國々より巻絹を集候

［元］いまた参らす候ほとに

［渋明］遅なはり候

【1ウ】

［元］今を始て三熊野の、〳〵

[渋明] 今を始めの旅衣、〳〵

[元渋] いさや急かむ

[明] 下らむ

[元渋] 宮この手ふりなりとても

[明] 都のてぶり引かへて

[元] 是は殊さら王土のめい

[渋] 殊更是は王土の命

[明] ことさら是は官の命

【2オ】

[元渋] 朝もよひ

[明] 朝もよし

[元明] 山また山をそことしも

[渋] 山又山をそことなく（「なく」朱線見消、「しも」と朱傍記）

[元] 今をおはしめて

[渋明] 今ぞ始めて

[元] 急候程にお山に着て候、先音なしの天神に

[渋] 急候程に、三熊野に着て候、先々音無の天神へ

[明] 是ははや三熊野に着て候、まづ〳〵音無の天神へ

[元] 冬梅の匂ひの聞え候何くにか候覧や

[渋] や、冬梅の匂ひの聞え候、いづくにか候らん

[明] や、冬梅のかをり候、いづくにか候らん

[元] 是成梅にて候はいかに

[渋明] 実是なる梅にて候

【2ウ】

[元] かなへて給り候へといひもあへねは言葉の葉を

[渋] 叶へて給り候へと、神に祈の言の葉を

[明] かなへてたび給へ、神に手向けの言の葉を

[元渋] 心の中に手向つゝ、急き参りて先君につかへ申さむ
[明] 心の中に捧つゝ、今は参りて、まづ此絹を奉らむ

【3オ】
[元] 汝一人をろかなり
[渋明] 汝一人をろかなる（[渋] は「お」を胡粉で抹消し「を」と朱書）
[元] そのしも人をは
[渋] 其下人（ゲニン）をは（「下人」に「ゲニン」と朱傍訓）
[明] そのものをば
[元渋] 其者はきのふ音なしの天神にて
[明] きのふおとなしにて
[元] 手向しなれは
[渋] 手向し者なれば
[明] 手むく

【3ウ】
[元渋] 納受あれは神慮すこし涼しき三熱のくるしみをまぬかる、それのみか、人倫こゝろなし
[明] すなはち納受して神慮涼しきことを得たりなにとてか、人倫心なき

【4オ】
[元] 御神侘にて御座候そ
[渋明] 御事にて候ぞ
[元] かのものはきのふをとなしの天神にて
[渋] 此者は音無の天神にて
[明] 此ものはおとなしにて
[元渋] 縄をとき給へ
[明] 縄をゆるすべし
[元] 是はおもひもよらぬ事を
[渋明] 是はふしぎなる事を

［元］かやうにいやしき者
［渋明］か程賤しき者

［元明］うたかはしく社候へ
［渋］疑はしき神慮かと存候ホ（に）（「へ」墨で見消線、「に」と墨で傍記）

【4ウ】
［元］猶も神慮を偽るとや
［渋］猶も神慮を偽りとや
［明］猶も神慮をうたかふや

［元］其上の句
［渋明］上の句

［元］下をはつくへき也
［渋］下の句をば続くべし
［明］下の句をつぐべきなり

［元］色事にそみて
［渋］色ことなりしを何となく、心もそみて
［明］色ことなりしに何となく心もそみて

【5オ】
［元渋］うたかひなきものを
［明］偽なき物を

【5ウ】
［元］扨はうたかひもなき神慮にて候程に縄をはとかふするにて候、猶々有難き御事委く御物語候ひて、まよひの凡夫を御しめし候へ
［渋明］（ナシ）

［元］先神は
［渋明］夫神は

【6オ】

［元］さんなむ身みたへて
［渋］さんなんみゝたへて
［明］三難耳にたえて

【6ウ】
［元］ゆふいふ一しつさう
［渋明］唯有一實相

［元］釈迦の御もとに契りて
［渋］釈迦の御もとに契りてル（「し」に墨で抹消符）
［明］釋迦の御元に契りてし

［元明］詠哥あれは
［渋］詠し給へば（「し給へば」朱線見消、「哥」と墨で傍記、「かあれ」と朱傍訓）

［元渋］かひらえに契りし事のかひありて、文殊の御顔を
［明］迦毘羅衛に、ともに契りしかひありて、文殊の御顔

【7オ】
［元］さむき世のはしめ
［渋］寒き世のためし
［明］さむきよの御哥

［元］風のとけとそおもはする
［渋］風のとけとぞ思はるゝ
［明］風のどけくぞ思ほゆる

［元］のつとを参らせられて神をすゝしめ申され候へ
［渋］祝言を参らせられ候ひて、神をあけ申され候へ
［明］祝詞をまいらせられ候ひて、神をすゞしめ申され候へ

【7ウ】
［元］灵地となり
［渋］灵地となわ（「る」に朱の見消線、「り」と墨で傍記）
［明］霊地となる

［元渋］されはみたけは金剛界のまんたら

［明］さればすなはち金剛界のまむだら

［元渋］飛行を出して神かたりするこそ

［明］飛行をなして、神が丶ります社

【8オ】

［元］中のこんせんは

［渋明］中の御前は

［元渋］薬となつて

［明］薬をあたへ

［元渋］三世の覚母たり

［明］三世の覚母なり

［元渋］殊數をもみ

［明］小斎ごろも

【8ウ】

［元］是迄なれや

［渋明］是迄なりや

明和改正謡本の独自性は同様だが、一方で西丸献上謡本と明和本に共通する本文（西丸献上謡本の改訂本文を含む）が元禄三年六月刊本と異なる例が、多数確認できる。1オ「抑是は」「宣旨に任せ」「國々より」「遅なはり」、1ウ「今を始めの旅衣」「殊更是は」、2オ「今ぞ始めて」「三熊野に」「先々音無の天神へ」「や、冬梅の」「いづくにか候らん」「実是なる梅にて候」、3オ「をろかなる」、4オ「御事にて候ぞ」「是はふしぎなる事を」「か程賤しき者」、4ウ「上の句」「何となく、心もそみて」、5ウ「夫神は」、7オ「祝言を参らせられ候ひて」、8ウ「是迄なりや」などが、そうした例である。5ウの［元］「扨はうたかひもなき」以下のまとまった本文が［渋］にも［明］にもないことは、特に注意したい。そして、2ウ［渋］「叶へて給り候へと、神に祈の言の葉を」、4オ［渋］「此者は音無の天神にて」、4ウ［渋］「色ことなりしを何となく、心もそみて」などの例は、［渋］が［元］と［明］の中間的な本文形態を示しているようにみえる。中には、4ウ「疑はしき神慮かと存候不（に）」など、［渋］が［元］

［明］共通本文とも異なる例もみられるが、全体としては［明］が［渋］に近い本文を改訂することで成立した形跡が伺える。

◆龍虎

西丸献上識語本（［渋］）は後見返し左下に朱陰方印「元章之印」があり、観世元章手沢本であることが明確な謡本である。胡粉で抹消して上書している所もあるが、元の字の判読が難しく、最終本文に異同がない場合は掲出していない（例としては、3ウ［渋］「古跡をー尋」（「を」と「尋」の間の字を胡粉で抹消し、縦線を付す）。6オ［渋］「猛虎深山に風をおこす」の「猛」、胡粉抹消跡に朱傍記。7オ［渋］「暇申さんとゆふ柴の」の「柴」、胡粉抹消跡に上書、など）。

対校本には、元禄三年六月山本長兵衛刊本の百番にない曲目を補う形で、後年に同様の刊記を付して刊行された三十番本（鴻山文庫五235）と、明和改正謡本を用いる。

＊［渋］渋表紙一番綴謡本「龍虎」（100／18／6）識語「卯月九日西丸へ上ル」

【1オ】

［元］是は諸国一見の

［渋］かやうに候者は諸國一見の（「かやうに候者は」を朱線見消、墨で「是は」と傍記）

［明］加様に候者は、諸國一見の

【1ウ】

［元渋］能便舩候間、此は思ひ立渡唐仕候

［明］能便舩の候間、たゞ今渡唐仕候

［元渋］筑紫を跡になしはて、

［明］筑紫を跡に見なしつゝ

［元］遥々と思ひしに

［渋］遥々とおもひ候ひしに

［明］遥々と思ひつるに

［元渋］かうしん安穏に（［渋］は「かうしむ」に「江神」と朱傍訓を付す）

［明］（ナシ）

【2オ】

［元明］所々を一見

［渋］［　　］一見（［　　］部分、「所々を」を胡粉で抹消）

［元渋］村竹の

［明］一村の　＊以下、［明］は「竹」字を含む詞章を「たけく」も含め全て置き換える。

【2ウ】

＊［元］2ウ1行目「折をえて、春の薪に」以下、3オ6行目「帰る山路の、くるしさよ〳〵」まで、［明］ナシ。当該部分は［元］［渋］のみ対校する。

【3オ】

［元］誠にしむぬ老も

［渋］誠に知ぬ老も（「知」部分、「しん」を胡粉で抹消し上書）

【3ウ】

［元渋］入唐の沙門

［明］日本の沙門

［元明］御覧して候物かな

［渋］御覧じ候物かな

［元渋］遙々思ひ立て候

［明］遙々入唐申て候

［元渋］有難かりける御ことかな

［明］いとありがたき御事かな

【4ウ】

［元渋］向ひに見えたる竹林に

［明］向ひに見えたる林の上に

【5オ】

［元渋］あの竹林の岩洞は虎の栖にて候を

［明］あの山本の岩窟は虎の栖に候を

【5ウ】

［元明］蝸牛の角の上にして

［渋］蝸牛の角のうへにして〳〵（返しに抹消符）＊最終本文は異同なし

［元渋］猶々龍虎の戦ひの

［明］猶々龍虎のあらそひの

【6オ】

［元渋］何れも勢ひ妙にして

［明］何れも勢ひつよくして

［元明］互の勢をあらそふ事

［渋］たがひの勢　あらそふ事（「勢」の後の「を」を胡粉で抹消）

【6ウ】

［元渋］本より竹は直にして

［明］かしこの林直にして

［元渋］羅漢に仕へ奉る

［明］羅漢に仕へ申つゝ

【7オ】

［元渋］是そ和國の物語

［明］是ぞ龍虎のものがたり

［元渋］竹の林のこなたなる

［明］繁る林のこなたなる

【7ウ】

［元渋］竹林を遥に

［明］はやしを遥に

【8オ】

［元渋］竹林に覆ひ

［明］林に覆ひ

［元渋］竹林の岩洞に
［明］いはほの中に

【8ウ】

［元渋］かたきを追手に
［明］かたきを目にかけ

［元渋］かゝりける所に、〳〵
［明］かゝりけるところに

［元渋］虎乱のいきほひたけく
［明］虎乱のいきほひつよく

［元渋］竹枝を折て
［明］爪をとぎたて

【9オ】

［元渋］悪虎をまかんと
［明］悪虎のうへに

［元渋］追つめくはむとすれは
［明］追つめあらそひけるが

［元明］雲ゐに遥にのほれは
［渋］雲ゐに遥にのぼるを（「るを」、胡粉抹消跡に上書）

［元渋］悪虎は勢ひ
［明］悪虎はしたひ

［元渋］無念のいきほひ
［明］うそふくよそほひ

［元渋］又竹林に飛かへり、また竹林に飛帰つて其まゝ岩洞に入にける
［明］又巌頭に飛かけり、また巌頭に、とびかけつて其まゝ岩窟に入にけり

龍虎の場合、西丸献上識語本に明和改正謡本との関連性は確

認できず、元禄三年六月の刊記を持つ三十番本とかなり近い本文を持っている。この三十番本は文化二年（一八〇五）刊の『随一小謡摩訶大成』の頭書に、明和の新改正と比較する形で「観世流の謡に中改正とハ、観世周雪退隠の後上京して改められし直し也」と言及される十二世観世大夫重賢（周雪、延享三年（一七四六）没）の中改正に該当する本である可能性が推定されている謡本である。[7] ただし、2丁目2行目以降は明暦三年四月野田弥兵衛刊本の覆刻で、本文内容に相違はない。一方、1オの最初に挙げた異同箇所の［元］「是は」は、明暦野田本では「加様に候者は」となっており、［渋］のもとの本文と同様である。また、1ウの［元］「遥々と思ひしに」は、明暦野田本では「遥々と思候しに」で、これも［渋］と同様である。西丸献上識語本の書入れ改訂前の本文は、三十番本に比べて明暦野田本により近いと言える。

西丸献上識語本に施された改訂が、元禄三年六月の刊記を持つ三十番本とも明和本とも異なる例としては、2オの［渋］「所々を」の抹消、6オの［渋］「勢を」の「を」の抹消、9オの「雲ゐに遥にのぼるを」などが挙げられる。明和本では「竹」字を含む言葉を「たけく」も含めて全て改訂しており、これは明和本の「経政」「第六天」などにも共通しているが、将軍幼名の竹千代を憚ったものと推測される。

なお、観世宗節筆江戸初期節付本「龍虎」[8]と比較すると、先述の一丁目の二箇所の異同箇所は、明暦野田本と同様の形だが、右に挙げた校異とは異なる箇所で、西丸献上識語本や三十番本との異同が多く確認できる。宗節本に書入れをしたのは九世身愛かとも推定されているが、その改訂詞章の中には、西丸献上識語本や三十番本と一致するものも含まれる。

◆江乃島

＊［西］一番綴謡本「［江乃嶋］」（100／27）

表紙を闕く。末尾に清親の筆跡で、「享保十四年七月廿五日／西丸御本ニ右之通章（并）直（シ）共相納差上（ル）」と朱書。

【1オ】

［元西］欽明天皇に仕へ奉る

［明］當今につかへ奉る

［元西］相模の国江野

［明］相模の国榎野

［元西］卯月十日あまりに

［明］卯月十日あまり

【1ウ】

［元西］江の嶋

［明］榎の島　＊以下、同様の表記の異同は掲出を省略

［元西］嶋の雲上に天女顕れ給ふ、是弁才天影向の地にて

［明］彼島に弁才天影向し給ひ

［元西］急見て参れ

［明］見てまいれ

［元西］東海道に下向仕候

［明］相模の国へ下向仕候

［元西］あつま路もそなたのそらに

［明］あづま路は、そなたの空と

［元明］にほのうみ

［西］湖の海

【2オ】

［元西］月影もいく山々にうつりこし

［明］月影は、いく山々を照らすらん

［元西］日を重て急候程に

［明］日を重候ほどに

［元西］此浦の者

［明］此あたりの者

［元明］事の由をうかゝはは や

［西］事の由をも窺はゞや

［明］事の由をたづねばや

【2ウ】

＊［元］2ウ1行目「うらふれ渡る、沖津風」以下、3オ2行目「心すこくはすまさらまし」まで［明］は「袖ふき返す、沖津風」以下の別文（掲出省略）。［西］の相当箇所は［元］と異同なし。

【3オ】

［元西］なひきしたかふ此國の、つきせぬ御代はありかたや〳〵

［明］動ず盡ず豊なる、御代の御影ぞ、有難き〳〵

【3ウ】

［元西］我江の嶋にあかり

［明］我江の島に参り

［元西］おことは此浦の者か

［明］汝は此浦の者か

［元西］山上山下岩窟社〳〵を清め申者にて候

［明］山上の社山下の岩窟を清申候

［元西］扨御身はいつくよりの

［明］さて何くよりの

【4オ】

［元］是は欽明天皇に仕へ奉る

［西］是は忝も欽明天皇に仕へ奉る（「奉る」朱線見消、「申」と朱傍記）

［明］是は當今に仕へ奉る

［元西］是迄勅使を下さるゝなり

［明］はる〳〵爰に下りたり

［元西］御門よりの勅使にてましますそや

［明］勅使にて座すかや

［元西］欽明天皇十三年、卯月十二日戌の刻より、同廿三日辰の刻

［明］去る卯月十二日より、同廿三日

＊［元］5オ1行目「雲上より盤石を下し」以下、5ウ4行目「とり〳〵に嶋を作り給へは」まで［明］ナシ。当該箇所は［元］のみ対校。

【4ウ】

［元西］江野南海湖水、湊の口に雲霞

［明］此所の海上雲霧

［元］宕巖おほく

［西］嶌岸多く

［元西］天水ふんうんたり、大地震動する事（［西］は「ふんうん」を「汾沄」と表記）

［明］天水是が為に別がたく、地も又大にふるう事

［元］銅しよを持て

［西］銅料を以て

［元西］とはかりありて天女雲上にあらはれ

［西］暫時有て天女雲上に顕はれて

［明］とばかり在て天女雲間に顕れ

【5ウ】

［元西］梵天帝釈四大天王、上界の天人下界の龍神

［明］梵天帝釈四大天王

［元西］諸々の天衆龍神水火雷電山神鬼魅夜叉羅刹（ただし［西］は「諸々」を「諸」とし、また「雷電神」とした上で「神」に朱の抹消符を付す）

［明］諸の天部龍神夜叉羅刹

［元西］のこらす爰にあらはれ給ひ

［明］のこらず爰にあらはれ出て

【5オ】

【6オ】

［元西］江野に名そらへて

［明］柄野に、なぞらへて

［元西］天部の影向
［明］天女の影向

［元］中〳〵の事此嶋は、各諸神まします
［西］中〳〵の事此嶋に、各諸神まします
［明］中々の事このしまに、神々集まします

【6ウ】
［元西］天部と夫婦の御神にて、衆生済度の御方便
［明］天女と夫婦の御神にて

【7オ】
［元西］悪神は万里の
［明］悪神も萬里の

【7ウ】
［元］目出度子細共
［西明］目出度子細

［元］残さすもの語申候へ
［西明］残さす申候へ

［元西］念比に申上候へし（ただし［西］は全体を朱線見消）
［明］（ナシ）

［元西］數十余丈なり
［明］數十丈なり

［元］清浅たり
［西明］清濺たり

【8オ】
［元］此池をしめて
［西明］此地をしめて

【8ウ】
［元西］大蛇すめり

［明］悪龍すめり

［元］眼に白日をつなぬき身に黒雲をまつへり
［西］眼に白日を貫き身に黒雲をまつへり
［明］眼は、白日と耀き、身に黒雲をまとへり

［元西］垂仁天皇の御宇迄は十一代の帝祚をへ
［明］垂仁天皇の御宇まで

【9オ】
［元西］天部は龍に向ひ
［明］天女は龍に向ひ

［元］守護人
［西明］守護神

［元西］今より殺害
［明］それより殺害

【10オ】
［元西］天部の夫婦の神
［明］天女と夫婦の神

［元西］天部の御姿
［明］天女の御姿

［元西］岐伯か絶軋をさきにあけ、張儀か英聲を後にはす（ただし［西］は「岐伯」を「岐白」とする）
［明］たちまち異香遍満し、微妙の音楽雲中に聞ゆ

［元］是総明勇進弁才天の
［西］是聡明勇進弁才天の
［明］実聰明勇進弁才天は

【10ウ】
［元西］卞和か玉もなにならす
［明］干珠満珠もなにならぬ

［元西］天部のみ姿
［明］天女の御姿

［元西］衆生済度のその御方便
［明］衆生済度の其御誓

【11オ】
［元］現寿無比楽
［西明］現受無比楽

【11ウ】
［元］眼に白日をつなぬき、其身に黒雲をまつへり
［西］眼に白日を貫き、其身に黒雲をまつへり
［明］眼は白日とかゝやき、其身に黒雲をまとへり

【12オ】
［元西］辨財天部
［明］辨財天女

［元西］すゝみとるてふ
［明］つたひ下りて

［元西］磯うつ波も
［明］きしうつ波も

［元］雲をふく
［西明］雲をふき

【12ウ】
［元西］其時天部は
［明］其時天女は

西丸献上識語本は元禄三年六月刊本に近く、大部分が明和改正謡本との校異となった。江乃嶋の場合、西丸献上識語本の段階での改訂が明和本の改訂につながっていくような経緯は認められない。

四、天明新十番所収曲「〔第六天〕」「〔逆鉾〕」「吉野天人」

西丸献上識語本のうち、〔第六天〕・〔逆鉾〕・吉野天人の計三曲については、先述の通り、観世流謡本の近世刊本としては（番外謡本を除けば）明和改正謡本で新たに収められた曲目で、明和本廃止の後も、観世流の演目として残り、天明四年（一七八四）六月山本長兵衛刊本の天明新十番に収められた。寛延三年（一七五〇）の観世元章の勧進能で演じられたのが契機となって、観世流の演能曲目に加えられた可能性も指摘されている。[9] これに先立ち、第六天は元文五年（一七四〇）十月二十二日に、江戸城二之丸慰能で観世大夫嗣子の三十郎元章が演じており、逆鉾は寛延二年（一七四九）五月二十三日の江戸城本丸奥慰能で、観世大夫となっていた元章が演じている（触流し御能組（一））。[10] その前段階となると、徳川綱吉・家宣の時代の稀曲ブームの中での重記の上演になる。吉野天人の謡本では、末尾に朱で「十月廿五日／西丸へ上ル」と記した後に、元禄十年（一六九七）二月三日の柳沢出羽守保明（吉保）邸への綱吉御成の際、初めて十三世観世大夫重記が吉野天人を務めた際の番組を朱書している。第六天も、元禄十一年二月三十日に観世重記が演じている。[11] 時を経た後、これらを観世流の演目としたのが元章であった。そして、版本としては天明四年六月山本長兵衛刊本に収められ、天明新十番と称される曲になる。天明新十番は、代主・忠信・吉野天人・烏帽子折・合甫・逆矛・第六天・住吉詣・恋重荷・大瓶猩々の十曲である。表章氏は、天明四年刊本の詞章について、

「烏帽子折・恋重荷は元禄本とは著しく異なり、明和本とも一致しない。大よそは、明和本の形をもとにして、その改正詞章の行き過ぎを是正したものと言えよう。他の七番も、明和本をかなり訂正しており、これは明和本以前の、寛延の勧進能の当時の詞章に復原したものかと思われるが、217・223の番外本と重なる曲は、大むねそれに近い。大瓶猩々は217に駒形猩々の名で収められた曲とほぼ同じである」（高橋注、217は貞享三年九月林和泉掾刊番外謡本、223は元禄二年正月林和泉掾刊番外謡本で、それぞれ三百番本・四百番本と通称される）

と位置づけている。

これまで主に、元禄三年六月山本長兵衛刊本と明和改正謡本と対校していたが、この三曲については元禄三年六月刊本に収められていないことから、三百番本（又は四百番本）、明和本、天明四年六月山本長兵衛刊本の三本と対校することにより、その本文の位置を探ることにしたい。以下、校異の位置は、三百番本・四百番本の丁付によって示す。

◆第六天

＊［石］石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本「〔第六天〕」（4／2／34）識語「卯月十六日西丸上ル」

＊対校本

［四］元禄二年正月林和泉掾刊番外謡本（四百番本）

［明］明和二年六月出雲寺和泉掾刊本（81／2／15）

［天］天明四年六月山本長兵衛刊本（法政大学鴻山文庫五377イ）

【1オ】（以下［四］の丁付での位置）

［四石天］心の花を手向とて、〳〵太神宮に参らん

［明］御手にまつはる折釧、〳〵、いすゞの宮にまいらむ

［四］是は洛陽のかたはらに解脱と申

［石］是は洛陽の傍に解脱と申（七字分、墨線で見消）

［明天］是は解脱と申

［四］旅衣九の重を

［石］旅衣九重ねを

［明天］旅衣けふ九重を

【1ウ】

［四石天］杉の木のまに波よする

［明］杉の木の間に眺むれば

［四］竹の都も程なくわたらへの宮に

［石］竹の都も程もなく度會の宮に

［明］阿濃の入江の程もなく度會の宮に

［天］たけの都の程もなく度會の宮に

【2オ】

［四石天］有かたかりし、宮居かな

［明］実有がたき、宮居かな

［四明天］心やすくそ任せつる

［石］心やすくに任せつる

【2ウ】

［四明天］和光同塵の本願

［石］和光同塵本願

【3オ】

［四石］濁水の我等

［明天］濁世の我ら

［四石天］神力の妙楽

［明］神力の冥助

＊［四］は続く記事に誤刻があり、「神力の妙楽をかふむらさらんや」の「むら」脱字。

［四石天］語り参らせうするにて候

［明］語つてきかせ申候べし

［四石］やまとたけのみこと、七百余歳に至るまで

［明］倭姫の命、神鏡にかしづきて

［天］倭姫の命七百余歳に至るまで

【3ウ】

［四石天］洗ひしにより

［明］洗給ひしより

［四石］垂仁天皇の御宇に、はしめて

［明］垂仁の御宇におこりて

［天］垂仁の御宇にはじめて

［四石天］日神月神を

［明］内外の御神を

［四石天］ひるこそさのをは

［明］月よみそさのをは

【4オ】

［四石］高天か原

［明］高天原

［天］高天の原

［四］同中にも、岩戸の舞の袖返す神楽はおもしろや　シテ謹上

地再拝、人たいらかに生るゝは、丸か力に、よつてなり

［石］地中にも、岩戸の舞の袖返す神楽は面白や　シテ謹上　地再拝　シテ人平かに生るゝは、丸か力に、よつてなり（全体を朱線見消）

［明天］（ナシ）

【4ウ】

［四石］かゝる恵をおしなへて、〳〵

［明］かゝる恵みをおしなへて

［天］かゝるめぐみをおしなみて

［四石］たのめやたのめ神の告そと

［明天］頼めや頼め神の告

［四石］シテ榊葉そへて　同とり〳〵に

［明天］榊葉そへ

［四］爰に来りて申そとて

［石］夢に来りて申とて（「申」の後に「そ」傍記挿入）

［明天］夢に来りて申とて

［四］失にけり

［石明天］失にけり〳〵

【5オ】

［四］風雨いかつち

［石明天］風雨雷電（［明］は「フウウライデン」と傍訓あり）

［四石］さて〳〵供奉はたれ〳〵そ、〳〵

［明天］さて又供奉は誰〳〵ぞ

［四石］うんま四ま（［石］は「蘊魔死魔」）
［明天］陰魔死魔

［四石］天子こほうま（［四］は「天」字、「大」に近い）
［明］天魔業魔
［天］天子業魔

【5ウ】

［四石］此比帝尺の軍にうちかつて、手に日月をにきり、身を須弥の上にをきて、一足に大海をふむといへとも、けんそく毎日、数万人をほろほす其故は、南贍部州に沙門有て、衆生を化度し、法力を増長す、かれをさまたけ、我道に誘引せん事いたはしや（ただし［石］は「法力を増長す」を「法力増長す」とする）
［明天］（ナシ）

【6オ】

［四石］則しやう天いかりをなして、〳〵、鉄杖をふり上尊にかゝれは
［明］即みこと、顕はれ給へばさしもにいさむ、六天なれどもおそれをなしてぞ、見えたりける
［天］則そさのを顕れ給ひ、すなはち素盞烏あらはれ給へばさしもにたけき、六天なれども恐れをなしてぞ、見えたりける

［四石］素盞烏是を見るよりも、〳〵
［明］みことは猶も、いかり給ひ、〳〵て
［天］そさのを猶もいかり給ひ、〳〵て

［四石天］寶棒を取なをしうたんとせしに
［明］ずはえを取なほしうたむとし給ふに

［四石］ありしゆのことく、なさんとせしを
［明天］忽さむ〳〵に苦をみせ給へば

［四石］みことは歓𤼈の氣色をあらはし、雲ゐにあからせ給ひけれは
［明天］尊は雲ゐにあがらせ給ひ

［石］は、明和本との比較においては四百番本に近い。四百番本と異なって明和本と共通する部分はほとんどなく、明和本との特別な関係は認められない。四百番本の大きな特色として、4オに示した詞章で神楽が入る点が挙げられ、［石］の当初の本文は四百番本と同様だが、それを朱線で消している。また、四百番本の5ウの魔王と帝尺の軍との争いを描く詞章部分は、［明］［天］にはない本文だが、［石］は小異を含むものの、相当する本文がある。また、天明四年刊本は明和の改訂をもとに近い形に戻している部分もあるものの、明和本の影響がかなり残っている。1ウに挙げた［天］「たけの都の程もなく度會の宮に」は、明和本が「竹の都」を憚って「阿濃の入江」に改めたのを元に戻している例である。

◆逆鉾

＊［渋］渋表紙一番綴謡本「〔逆鉾〕」（80／7）識語「西丸へ上ル／十月廿一日」

＊対校本

［四］元禄二年正月林和泉掾刊番外謡本（四百番本）

［明］明和二年六月出雲寺和泉掾刊本（81／2／1）

［天］天明四年六月山本長兵衛刊本（法政大学鴻山文庫五377イ）

【1オ】（以下［四］の丁付での位置）

［四］奈良の御門

［渋明天］當今

【1ウ】

［四渋天］なを雲遠き

［明］雲居に遠き

［四］井手の下帯

［渋明天］井出の下紐（［渋］は「紐」を胡粉で抹消し「紐」と上書）

［四渋天］二人色つく秋の、紅葉哉　ッレ紅葉の色も時めきて　二人錦をはれる、けしき哉

［明］二人ちかづきぬらん、夕時雨　ッレしば〳〵降ばはやましに　二人くれなゐ深き山路かな

【2オ】

［四渋天］是は當社
［明］是は當國

［四天］なふしよくなから
［渋］なうしよくながら
［明］里人ながら

［四］宮路にかよひ
［渋］宮路に（を）かよひ（「に」に朱の抹消符、「を」と墨で傍記）
［天明］宮路を通ひ

［四］頼むたのみも
［渋］頼むねがひも（「ねがひ」は「たのみ」に抹消符を付し「ねかひ」と傍記し、その全体を胡粉で抹消し「ねがひ」と上書）
［明天］頼願ひも

［四渋天］紅葉もいたつらにたゝやみの夜のにしき也
［明］紅葉は照まさり火影にも実いちじるし

【2ウ】
［四渋天］岸やくつるらん、〳〵
［明］きしもうつりそふ、〳〵

［四］水の色そ
［渋天明］水の色は

［四渋天］にこる共へたてしな
［明］きよけしや隔なき

［四渋天］御影も紅葉はの、爰はときはの色はへて
［明］みかげのくもりなき、紅葉も今は色はへて

【3オ】
［四］一見の者にて候、しき山への
［渋］一見の者にて候、寶山への
［明天］一見の者なり、寶山への

［四］安間の事

[渋] 安き間の事（御事かな）（「事」に抹消符、「御事かな」と傍記）
[明天] 安き間の御事かな

[四] 此方へ御入候へ
[渋] 此方へ御入（出）候へ（「入」に朱の抹消符、「出」と朱傍記）
[明天] こなたへ御出候へ

【3ウ】
[四] あらうれしや候
[渋明天] 荒嬉しや

[四渋天] 日本第一
[明] 我朝第一

[四] 此所の事にて候
[渋] 此所の御事にて候（「御」は後筆で、行頭に一格高く記される）
[明] この御山にて候
[天] 此所の御事にて候

[四] さらは（ワキ）御山のいはれを御物かたり候へ
[渋] さらは（ワキ）此御山の謂を委しく御物かたり候へ（当該ワキ台詞に見消線を付し、その前のシテ台詞末尾に「當社の謂委く語て聞せ申候べし」と傍記挿入）
[明天] 當社（シテ）のいはれ委語つて聞せ申候べし

【4オ】
[四渋天] 抑瀧まつりの御神と申は則當社の御事也、昔てんそのみことのり、末あきらか成御国とかや（ただし[渋天]は「と申は」を「とは」とする）
[明] 抑國の常立の尊と申しは、かたじけなくも天つ御神の、のりごと受て山陰道を、よゝもつ國と栄木葉の、いや栄させ給ひけり

【4ウ】
[四渋天] いさなきいさなみとかうす
[明] 伊弉諾伊弉冊と申奉る

[四渋天] 時に国とこたち、いさなきにたくしてのたまはく

[明] ときに天神伊弉諾のみことに宣はく

[四] 豊あしはらに千五百しゆの国有

[渋] 豊蘆原に千五百種(秋瑞穂アキミツヲ)の國あり（「に」に抹消符、「種」に見消線を付し「秋瑞穂(アキミツヲ)」と傍記）

[明天] 豊蘆原千五百秋瑞穂の國あり

[四渋天] 汝よくしるへしとて、則あまの御鉾を、さつけ給ふ（ただし[渋] は「御鉾」の右に「とボコ」、「御」の左に「ヌ」と傍記。

[明] 汝能しつべしとて、すなはちあまつ瓊ぼこを、さづけ給ふ（傍訓のうち「瓊」字には「ヌ」と付す）

[四渋天] 直なる道を

[明] すぐなる道に

[四] 御鉾をあらため

[渋] 御鉾を改めて（「て」は本行でなく傍記挿入）

[明天] 御ほこをあらためて

【5オ】

[四] 民もおさめえて

[渋] 民をも治めえて（「も」に抹消符、「を」と傍記）

[明天] 民ををさめ得て

[四] 国治り

[渋明天] 國土治まりて

[四渋天] 宝の山と号す也

[明] 号(ナヅケ)たり（「号」に「ナヅケ」と傍訓）

【5ウ】

[四] 問は名をえて

[渋] とへば名をへて（「て」字周辺に胡粉抹消の跡あり）

[明天] とへば名を得し

[四渋天] てらす日影や

［明］照す日影も

［四渋天］あめつちすなほなる事も、

［明］天地しづかなりとかや、

［四］爰こそたから身はしらす、国の宝の山

［渋］爰こそ~~た~~(ち)から~~身は~~(御は)しら~~す~~(の)、國の宝の山（「た」「す」に抹消符、「身」に縦線を引いて見消にして傍記）

［明］爰こそ國の御柱の、御代の寶の山

［天］爰こそたから御柱の、御代のたからの山

【6オ】

［四渋天］能々礼し給へや

［明］能々をがみ給へや

［四明天］実や立田の神の名の、〳〵

［渋］実や龍田の神の名~~を~~(の)、〳〵（「を」に見消線を付し左に「の」と墨書、それを胡粉で消し、右に「の」と朱傍記）

［四渋天］たからの御鉾同しくは

［明］寶の御矛をさむなる

［四渋天］かけはつかしき立田山の

［明］さしも名におふ龍田山の

【6ウ】＊以下7オにかけて三箇所の校異は、連続した詞章部分

［四渋天］御山のは、その紅葉かたしきて、は、その紅葉かたしきて、爰にかりねの枕より、音楽聞え花ふりて、いきやうくんするふしきさよ、〳〵

［明］（ナシ）

【7オ】

［四］（ナシ）

［渋］（本行にナシ。上部余白に「そめいろや、西くれなゐの山かづら、かざす紅葉の、龍田ひめ」と朱で書入）

［明天］そめいろや、西くれなゐの山かづら、かざすもみぢの、龍田ひめ

［四渋天］（ナシ）
［明］天女あらき風、とゞめしからに、天が下地草のかき葉もゆたけからなん

［四］和光に出ては立田の神
［渋明天］和光に出て立田の神

［四渋天］または寶山くりからみたけ
［明］こゝは所もたからのみやま

［四渋天］おとろかしたてまつれや
［明］すゞしめ奉れや

［四］かしはけ
［渋］かしはけ（手デ）（「け」に朱の抹消符を付し、右に「デ」と墨書、左に「手」と朱傍記）
［明天］かしは手

【7ウ】
［四］雲霧晴行月の
［渋明天］雲霧晴行日の

［四渋天］あまのみほこは
［明］天つ御矛は

［四渋天］和光同塵の御かたち
［明］和光同塵の御ちかひ

［四渋天］仏法流布の国たるへしやな
［明］仏法流布のためたるべしやな

【8オ】
［四］此御鉾をうつたへて
［渋］此御鉾をたづさへて（「う」に抹消符、「た」と傍記。「づ」の濁点も後筆か）
［明天］此御矛をたづさへて

［四］則みほこをさしおろしたまひ
［渋］則御鉾を指おろし給ひ（返）（「返」と傍記し、この一節を繰り返すことを示す）
［明天］即御矛をさしおろし、即御矛をさしおろし給ひ

［四］紀の国伊勢嶋つくし四海
［渋］紀伊（の）國伊勢嶋筑紫四國（「伊」の左に「の」と傍記）
［明］對馬壹岐嶋筑紫の國々
［天］きの國伊勢しまつくし四國

【8ウ】
［四］大八嶋の国となつて
［渋］大八嶋（州）の國と名付（「嶋」の左に「州」と傍記）
［明天］大八洲の國と名付

［四渋天］天地人の、さんさいと
［明］皇御神の、食國と
［四渋天］さなからけはしきあしはら
［明］さながらしげき、蘆原
［四渋天］山と成ぬ
［明］山となるを

【9オ】
［四渋天］あたりくたけは
［明］あたりくだけて

［四］おさまり奉り
［渋］納（め）り奉り（二字目の「り」に抹消符、「め」と傍記）
［明天］納め奉り

【9ウ】
［四］ひの物の
［渋］ひの物（もと）の（本）（「物」に抹消符、右に墨で「もと」、左に朱で「本」と傍記）
［明天］ひのもとの

明和本段階での改訂が著しい曲で、四百番本4オや6ウから7オにかけての部分などは明和本では大きく異なる。一方で、[渋]の本文が四百番本と異なり明和本と一致する箇所、また[渋]の改訂後の本文が明和本と一致する箇所も複数、確認できる。前者の例は、1オ「當今」、2ウ「水の色は」、3ウ「荒姫しや」、5オ「國土治まりて」、7オ「和光に出て」、7ウ「雲霧晴行日の」などである。後者の例は、3オ「安き間の御事かな」「此方へ御出候へ」、3ウ「當社の謂委く語て聞せ申候べし」、4ウ「豊蘆原千五百秋瑞穂の國」「御鉾を改めて」、5オ「民を治めえて」、7オ「そめいろや」以下、7オ「かしは手」、8オ「則御鉾を指おろし」の返し、9オ「納め奉り」、9ウ「ひのもとの」などである。特に、7オ「そめいろや、西くれなゐの山かづら、かざす紅葉の、龍田ひめ」の書入れは、注目される。[渋]の後見返し左下に、朱陰方印「元章之印」が捺されており、明和本の形は、西丸献上識語本に近い本文を、大きく改訂することで成立した可能性があろう。

天明四年刊本には、明和の改訂をもとに近い形に戻している部分と、明和本の影響を残す部分、両方がある。

◆吉野天人

＊[渋]渋表紙一番綴謡本「吉野天人」(80／17)識語「十月廿五日／西丸へ上ル」

＊対校本

[三]貞享三年九月林和泉掾刊番外謡本(三百番本)

[明]明和二年六月出雲寺和泉掾刊謡本(81／2／11)

[天]天明四年六月山本長兵衛刊本(法政大学鴻山文庫五377イ)

【1オ】(以下[三]の丁付での位置)

[三渋天]花の雲路を

[明]花を雲路の

[三渋天]中にも千本の桜を

[明]中にも嵐山の千本の桜を

[三明天]種とりし

[渋]種とめし(「め」を朱線見消、右に「とり」と朱傍記し朱線で見消、左に「り」と朱記)

【1ウ】

[三渋明] 若き人々を

[天] 若き人々をも

[三明] 今度和州に

[渋] 此度(只今)は和州に(「此度は」を朱線見消、右に「只今」と朱傍記し朱線見消、左に「此度」と朱傍記)

[天] 此度和州吉野に

[三] 色香にそみて

[渋] 色香にそめて(「めて」を朱線見消、「むや」と朱傍記)

[明天] 色香にそむや

[三渋天] よるふりけるか花いろの

[明] 夜はにふりしか花のいろ

【2オ】

[三渋天] 急候ほとに

[明] (ナシ)

[三] 嶺も尾上も皆花にて候

[渋明天] 峯も尾上も花にて候

[三] 分入はやと存候

[渋明天] 分入ばやと思ひ候

[三] 此よし野の花を

[渋明天] 此三吉野の花を

【2ウ】

[三] ふしきやな

[渋明天] 又見申せば

[三] そもいかなる人にてわたり候そ

[渋] いかなる人にて御座(わたり)候ぞ(「御座」を朱線見消、「わたり」と朱傍記)

[明天] いかなる人にてわたり候ぞ

［三渋天］春たつ山に日を送り、さなから花をともとして、山野に

［明］春にしなれば咲花を、さながらおのが友として、山路に

【3オ】

＊［三］3オ5行目「見もせぬひとやはなのとも」以下、3ウ6行目「いさなれ〳〵てなかめん」まで、［明］は「花にそむなる心とて」以下の異文（本文掲出は省略）。［渋］［天］はほぼ［三］と同文だが、［三］「いさなれ〳〵てなかめん」を［渋］［天］は「いざ〳〵馴て詠めん」とする。

【4オ】

［三渋天］いよ〳〵ふしむにこそ候へ

［明］わきて心のましますやらん

［三］上界の天人なるか

［渋］上界の天人なるが（「上界の」朱線見消）

［明天］天人なるが

［三］此はなのこすゑを宿りとして、唯今こゝに参りたり、今夜は

［渋］実に妙なる花の気色、心（△花に）引れて来りたり、今宵は（「心」まで朱線見消、「△花に」と朱傍記。「来りたり」は胡粉抹消跡に上書、胡粉下のもとの最初の二字「天降」か）

［明天］花にひかれて来りたり、今宵は

【4ウ】

［三］其いにしへの五節の舞、其小忌衣はそてをかへし

［渋］其小忌衣の羽袖を返し（「羽」は墨で追記。全体を朱線見消、右に「我友人をともなひつゝ」（我友人をともなひつ、）と朱傍記、左に「其いにしへの五節のまひ小忌の衣のは袖をかへし」（其いにしへの五節のまひ、小忌の衣のは袖をかへし）と朱傍記）

［明］其いにしへの五節のまひ、あまつ羽衣袖を返し

［天］其いにしへの五節のまひ、小忌の衣のは袖を返し

［三］月の夜遊に

［渋明天］月の夜遊を（［渋］は「月の夜遊に」の「に」の右に「を」と朱傍記、その全体を胡粉で抹消し「を」と上書）

【5オ】

[三渋天] 是おさまれる、御代とかや

[明] 是聖代のためしかや

[三] 鞨鼓や笛竹の

[渋] 鞨鼓や、糸竹の（「糸」、もとは「笛」とある字を胡粉で抹消し上書）

[明] かつこ、とり〳〵の

[天] かつこや糸たけの

[三渋天] 声澄渡る春風の

[明] 聲すみわたる、春風に

[三] 天津乙女のまのあたり、天くたるこそふしきなれ

[渋] 天津乙女の羽袖をまのあたり、天降るこそ、不思議なれ（かへし花にたわふれ舞ふとかや）

（「まのあたり」以下、朱線見消。右に「羽根袖を」、左に「かへし花にたわふれ舞ふとかや」と朱傍記）

[明天] 天津處女の羽袖を返し、花にたはふれ、まふとかや

[三] 天女は幾度

[渋天明] 乙女はいくたひ（[渋] は「天女」の「天」を胡粉で抹消し「乙」と上書）

【5ウ】

[三渋天] 実もうへなき

[明] 実たぐひなき

吉野天人は、明和本での改訂がそれほど大規模ではない。西丸献上識語本（[渋]）の本文が三百番本と異なり明和本と一致する箇所、また [渋] の改訂後の本文が明和本と一致する箇所も複数、確認できる。前者の例は、2オ「峯も尾上も花にて候」「分入ばやと思ひ候」「此三吉野の花を」、2ウ「又見申せば」などである。後者の例は、1ウ「色香にそむや」、2ウ「いかなる人にてわたり候ぞ」、4オの「上界の」削除、4ウ「花に引れて来りたり、今宵は」、4ウ「月の夜遊を」、5オ「天津乙女の羽袖をかへし花にたわふれ舞ふとかや」「乙女はいくたひ」などである。天明四年刊本で明和の改訂を元に戻している箇所は、三百番本よりは西丸献上識語本の方に近い。

なお、[渋]は西丸献上識語「十月廿五日／西丸へ上ル」の後に、元禄十年二月三日の柳沢出羽守保明（吉保）邸への綱吉御成の際、初めて観世大夫重記が吉野天人を務めた際の番組を朱書する。

五、西丸献上識語を持たない関連謡本

最後に、西丸献上識語を持たないものの、末尾に「享保十四年九月廿六日　清親」と朱書されている紺表紙一番綴謡本「谷行」の本文を検討する。対校本には、元禄三年六月山本長兵衛刊本と、明和改正謡本を用いる。

◆谷行

＊［紺］紺表紙一番綴謡本「谷行」（3／6／12）

【1オ】

［元］都今熊野

［紺明］今熊野

［元］師の阿闍梨

［紺明］帥の阿闍梨

［元］弟子を一人

［紺明］都に弟子を一人（［紺］は「都に」を朱線で見消にして、墨で「都に」と傍記）

［元］名をは松若と申候

［紺明］（ナシ）

［元］いまた幼く候ほとに、母のかたにそへ置て候

［紺明］母はかりに添て候

【1ウ】

［元明］嶺入を仕候程に

［紺］峯入を仕候間

［元］誰にて渡り候そ、や、師匠の御出にて候

［紺明］誰にて御入候そ、や、師匠の御出にて候よ

［元］如何に松若殿
［紺］いかに松若
［明］如何に花若
＊［元紺］が「松若」とする所、［明］は全て「花若」であり、以下この点のみの校異の掲出は省略する。

［元］母御の風の心地に御入候程に、ひさしく参らす候
［紺明］母御の風の心ちにて候程に参らす候

【2オ】
［元］先々某参りたる由
［紺明］先々某か参りたる由（［紺］は最初の四字「先々患僧（某）か」のように朱で見消改訂）

［元］畏て候
［紺明］（ナシ）
＊子方の台詞。［元］2オにもう一箇所あるがいずれも［紺明］にはナシ。

［元明］此方へ御入候へ
［紺］此方へ御出（入）候へ（朱線で見消し朱傍記）
＊子方の台詞。

［元］久しく参らす候ひて唯今参り候へは、
［紺明］久敷参らす候

［元］御痛はりのよし松若殿仰られ候、扨何と御座候そ
［紺明］又松若申され候は、風の心ちの由承候、いか様に御座候そ（「松若」、［明］は「花若」）

【2ウ】
［元］さむ候少こゝも能候程に
［紺明］風の心地は早苦しからす候

［元］扨は御心易存候、又唯今参る事余の儀にあらす
［紺明］扨は目出度候、又

［元］御峯入とやらんは、ことなる御行儀とこそ承りて候へ
［紺明］実々峯入とやらんは大事の行とこそ承りて候へ（［紺］「て」は朱傍記）

［元］さて松若は
［紺］扨松若も（「松若」、［明］は「花若」）

【3オ】
［元］いや〳〵難行捨身の行にて候程に
［紺明］（ナシ）

［元］幼き人の供すへき道
［紺明］稚者の供すへき道

［元］扨は御心易う候、めてたふやかて御出あらふするにて候
［紺明］扨は目出度頓て御帰り候へ

［元］いかに松若殿、母御によくつきそひいたはり御申候へ、やかて罷出ふするにて候
［紺明］（ナシ）

【3ウ】
［元］いかに師匠に申へき事の候
［紺明］いかに申へき事の候

［元］御供申候へし
［紺明］御供申さうするにて候

［元］いや〳〵唯今母御に申ことく
［紺明］いや唯今も母御に申候ことく（［紺］の「も」「候」は朱傍記）

［元］其上母御の風の心地
［紺明］其上母の風の心地

【4オ】
［元］いや母御の御痛はりにて候程に、御祈の為に御供申候へし

［紺］いや母の風の心ちにて候へはこそ、御祈りの為に参らふするにて候

［明］はゝの風の心ちにて候へば、御祈のために殊更まいりたう候

［元］扨は孝行のために仰られ候な、是も又尤にて候程に

［紺明］（ナシ）

［元］さらは

［紺明］さあらは

［元］松若殿の仰られ候は、峯入の供せうする由申され候程に

［紺明］松若峯入の供せうする由申され候間（「松若」、［明］は「花若」）

【4ウ】

［元］以前も申候ことく、おもひもよらぬ由申て候へは

［紺明］（ナシ）

［元］母御の御祈のために峯入したきよし仰候、何と御座候へき

［紺明］母御の風の御心地と云、難行捨身の道と申、旁叶ふましき由申候へは、御祈りの為に供すへき由申され候、いかゝ候へき

［元］峯入の御供申さむ社

［紺明］峯入の御供申さん事こそ

【5オ】

［元］唯々思ひとまり候へ

［紺明］唯思ひ留り候へ

［元］心をとめて御身につかへ

［紺明］（ナシ）

【5ウ】

［元］帰るさの心をとめて

［紺明］帰るさの心を添て

［元紺］やかて急くや足曳の
［明］頓早むる足曳の

【6オ】
［元］ワキ如何に面々へ申候、松若峯入の供せうするよし申候程に、俄に召つれて候、いまた幼きものにて候間痛はりて給り候へ　小先達近比めてたう候
［紺］（ナシ）
［明］ワキ諸人の為にと思ひ入峯は、岩間も法の、直路かな

【6ウ】
［元紺］けふ思たつ道埜への
［明］今思立道邊の
［元］唯孝行の神力に
［紺明］唯孝行の信力に

【7オ】
［元紺］けふのゆふへなれ
［明］ふゆの、夕なれ

【7ウ】
［元］急候程に、是ははや葛城一のむろに着て候、此所にて心しつかに御休み
［紺明］程もなく是はゝや一のむろに着て候、暫く是に
［元］師匠に申へき事
［紺明］申へき事
［元］此道にて左様の事をは申さぬ事にて候そ
［紺明］此道に出て左様の事は申さぬ事にて候

【8オ】
［元］旅のつかれにて候へし、御心易く思召候へ
［紺］道旅の草臥ツカレにて有へし、能々休み候へ（「道」「草臥」朱線見消、「旅」「ツカレ」と朱傍記）
［明］旅のつかれにて在べし、よく〳〵休候へ

［元］松若殿道より風のこゝちと仰られ候

［紺］松若殿の風（道より）の心ちの由承候（「の」朱線見消、「道より」と朱傍記）

［明］花若殿風の心ちのよし承候

［元］御心えなく候程に、先達へ尋申さはやと存候

［紺明］先達に問申さうするにて候

［元］もつ共にて候

［紺明］承候

［元］（小先達）いかに先達へ申へき事の候　（ワキ）何事にて候そ

［紺明］（ナシ）

［元］松若殿道より風のこゝちの由承候何と御座候そ

［紺明］松若殿風の心地と承候は、何と御入候そ、御心許なく候（「松若」、［明］は「花若」）

【8ウ】

［元］旅のつかれにて候

［紺明］旅の疲れにて有けに候

［元］御心易く思召れ候へ

［紺明］（ナシ）

［元］能痛はり申され候へ

［紺明］（ナシ）

【9オ】

［元］さむ候唯今其由を尋ね申て候へは～（中略）～大法に任せ、谷行にをこなひ申され候へ（9オ2行目～9ウ2行目）

［紺明］（ナシ）

【9ウ】

［元］さらは其由を申さうするにて候、いかに先達へ申候

［紺明］さらは先達へ其由申さうするにて候、いかに申候（［紺］「其由」左傍記）

[元] 旅の御草臥のよし仰候か
[紺] 道(旅)の草臥と承候か（「道」朱線見消、「旅」と朱傍記）
[明] 旅のつかれと承候が

[元] 以外に見えさせ給ひて候に
[紺明] 以外に見えさせ給て候

【10オ】
[元] 何とて大法のことく谷行には行ひ申され候はぬそ、かやうの事をは先達より社仰られ候へきに、然るへからさる由各申され候痛はしなから谷行にをこなひ申さうするにて候
[紺明] 憚多き申事にて候へ共、昔よりの大法にて候へは、谷行に行ひ申さうする由皆々申され候

【10ウ】
[元] 中々の事
[紺明] さん候

[元] 念比に申聞せうするにて候間すこしのいとまを給はり候へ
[紺明] 懇に申聞せうするにて候

[元] 心得申候、暫く待申さうするにて候
[紺明] 尤にて候

[元] 此道にいりて
[紺明] 此道に出て

【11オ】
[元] 忽に命を失ふ事
[紺明] 忽ち命を失ふ事

[元] 返々も進退極りて候
[紺] 進退究ゆて候（「つ」朱抹消符）
[明] 進退極りて候

[元] いのちをうしなはん事
[紺明] 命を捨ん事

［元］ひとつ心にかゝる事は
［紺明］（ナシ）

【11ウ】
［元］皆御名残こそ
［紺明］皆人々に御名残こそ

［元］涙にむせふ心そ悲しき
［紺明］涙に咽ふ心そ哀なる

［元］みやうけんわたくしなき故に、谷行に社行ひけれ
［紺］明鑑私なき儘に、谷行にこそ行ひけれ
［明］明鑑私なきまゝに、谷行の用意をなしにけり

【12オ】
［元紺］先達も師弟の契りの中
［明］先達は師弟の契の中

【12ウ】
［元］如夢幻泡影如露亦如雷
［紺明］如夢幻泡影如露亦如電

【13オ】
［元］皆面々に思ひきる
［紺明］皆面々に思ひきり

【13ウ】
［元］や、はや夜か明て候、急て御立あらふするにて候
［紺］早日のたけて候、急き御立有うするにて候
［明］早夕方になりて候、御立あらうずるにて候

［元］仰承候
［紺明］（ナシ）

［元］唯急いて御たち候へ
［紺明］（ナシ）

［元］彼者の母には何と申すへき
［紺明］彼者の母には何と申へきそ

［元］所詮病気も歎きも同し事にて候程に
［紺］所詮歎（病気）も果（歎）も同事にて候へは（いずれも墨線見消、墨で傍記）
［明］所詮病気も歎も同事にて候へば

【14オ】
［元］谷行に行ひて給り候へ
［紺明］谷行に行ふて給はり候へ

［元］先達の仰候は
［紺明］先達の仰には

［元］我をも谷行に行へとて歎伏て御座候、扨是は何と仕候へき
［紺］先達をも谷行に行ひ申せと仰候、扨何と仕候へき
［明］先達をも谷行に行ひ申せと仰候、何と仕候べき

【14ウ】
［元］二度そせいさせ申さうすると存候
［紺明］二度蘇生させ申さうするにて候

［元］実々是は仰尤にて候、さらは其由を先達へ申候へし
［紺明］是は尤にて候

【15オ】
［元］二度そせいさせ申さうすると
［紺］蘇生させ申さうする由（「由」に「と」と墨で傍記し、「と」を墨線で見消）
［明］蘇生させ申さうずるよし

［元］左様の事
［紺明］左様の事こそ

［元］面々の行徳もか様のためにて社候へ
［紺明］（ナシ）

【15ウ】
［元］しつしやの鬼神
［紺明］使者の鬼神

【16ウ】
［元］すなはち師匠にあたへたまひ
［紺明］（ナシ）

【17オ】
［元］のほるやたかまの
［紺明］上るは高天の

谷行の場合、清親奥書本と、明和改正謡本の本文が近いことが明らかである。元禄三年六月刊本と清親奥書本が「松若」とする所を、明和本は全て「花若」としているような点は、明和本成立に至る最終段階での改訂とみられるが、奥書の年記、享保十四年九月段階での観世清親の本文と明和本がかなり近い。本書は西丸献上識語がなく、これまで検討してきた他本とは異なるものの、表紙や筆跡によって西丸献上識語を持つ本との関連がうかがえ、上部余白に出典考証として和歌等を記していることからも、観世元章手沢本の可能性が高い。江戸城西丸への謡本献上が多く確認される享保十四年の清親奥書を持つ点でも、本文がこれほど明和本に近似していることは注目される。

六、小括

前稿で述べてきた通り、観世文庫に伝わる西丸献上識語を持つ謡本写本は、外組所収曲を主としており、江戸城西丸にいた将軍嗣子の家重に対して観世清親が献上した謡本の控えと考えられる。西丸献上の時期は享保十四年前後と推測されるが、最初に書かれた後に見消・胡粉・傍記・貼紙などによる本文改訂がされていることが多い。その改訂がどの段階のものなのか、清親時代に大久保往忠など幕府側の人物と改訂案を相談する中で書入れられたのか、あるいは寛延・宝暦年間頃になってから観世元章が改訂したのか、判然としないこともある。ただし、宝暦十年（一七六〇）に十代将軍となる徳川家治の正室五十宮倫子の名前を憚った「急」字の改訂が、西丸献上識語本にはう

かがえず、また明和改正謡本とも本文に大きな違いがあることが、これらの改訂の時期をある程度、示唆している。観世元章の印記があるのは一部だが、表紙などの共通性や考証の書入れなどを考えると、これらの謡本は全て十四世清親から十五世元章に受け継がれたものと推測される。

明和改正謡本における改訂の規模に比べると、西丸献上識語本の本文にうかがえる前代の本文との距離は大きくないものだが、それでもある程度の本文の変化を、具体的に確認することができた（対校に用いた元禄三年六月刊本を観世大夫の関わった正式な本文とすることはできないが、一つの指標にはなると考える）。

また、本稿で検討した曲の中でも、石畳艶出模様紺表紙五番綴謡本の「松山鏡」、渋表紙一番綴謡本の「〔巻絹〕」「〔逆鉾〕」「吉野天人」の検討結果は、明和改正謡本の本文が西丸献上識語本に近い形の本文を改訂することにより成立した可能性をうかがわせる。前稿（一）～（三）の中で、石畳艶出模様紺表紙謡本の「〔東方朔〕」（二種あるうち特に七番綴本）と「知章」、紺表紙謡本の「岩舩」「土蜘蛛」「〔小鍛冶〕」の五曲について、同様に明和本の前段階にあった本文をうかがわせるものとして評価したが、これに四曲を加えることとなった。残された課題も多いが、西丸献上識語本は享保年間の観世流謡曲の公的な本文と、その周辺での改訂の形跡を伝えるものであり、明和改正謡本の前段階の本文を考える際に重要な謡本の一群としても評価することができよう。

注

1　拙稿「享保期の江戸城西丸への謡本献上と謡曲改訂（一）（二）（三）」（『斯道文庫論集』五四～五六、二〇二〇年二月～二二年二月）。

2　拙稿「観世元章手沢・石畳艶出模様紺表紙一番綴謡本の周辺」（『観世元章の世界』檜書店、二〇一四年六月）においても「御裳濯川」としているが、訂正する。

3　表章『観世流史参究』（檜書店、二〇〇八年）「⑳十二世「左門」（三郎次郎）重賢（周雪）」。

4　伊藤正義編『版本番外謡曲集』（臨川書店、一九九〇年）の影印に拠った。

5　『観世文庫所蔵能楽資料解題目録』（檜書店、二〇二一年）では、「江戸初期写列帖装謡本「松山鏡」」として立項。

6 野上記念法政大学能楽研究所編「観世宗家所蔵文書目録（付解題）」（『観世』三九巻四号～四四巻二号、一九七二～七七年）。

7 前掲注3に示した『観世流史参究』「⑳十二世「左門」（三郎次郎）重賢（周雪）」に指摘がある。

8 観世文庫2／7／10。『観世文庫蔵 室町時代謡本集』（財団法人観世文庫、一九九七年）所収。

9 表章『鴻山文庫本の研究 謡本の部』わんや書店、一九六五年）。

10 演能記録については、国文学研究資料館の連歌・演能・雅楽データベースを参照した。

11 表章『観世流史参究』（檜書店、二〇〇八年）「㉑十三世「織部」重記（滋章）」。